

紹 介

Bollnow と文学研究について

——その哲学との関係において——

下 程 息

Tübingen 大学教授 Otto Friedrich Bollnow (14. 3. 1903 誕生) は、哲学者・教育学者として著名な、現代ドイツの代表的思想家の一人であるが、注目すべきことに、Bollnow はまた現代文学の研究家としても著しい業績をあげている。Bollnow の文学研究上の業績としては、彼の全著作のなかでの代表作の一つと目されている Rilke (1951) を筆頭に、その他 *Unruhe und Geborgenheit im Weltbild neuerer Dichter* (1953) と *Französischer Existentialismus* (1965) 等が挙げられるのであるが、前者においては Novalis, E. T. A. Hoffmann, Eichendorff, Hofmannsthal, Hesse, Weinheber, Jünger, Bergengruen 等のドイツの作家に関する諸論文が、後者においてはフランスの実存哲学や Camus, Sartre, Malraux, Bekett, Saint-Exupéry 等の現代フランス作家に関する諸論文がそれぞれ収められている。これらの著作は、哲学者の余技として書かれたもので Bollnow の仕事としてはあまり重要ではない、と云って片づけられるものでは決してなく、多数にのぼる Bollnow の著作のなかでもかなり大きな比重を占めているのである。

そしてまた哲学者・教育学者としての Bollnow 本来の著作である Dilthey (1936), *Das Wesen der Stimmungen* (1941), *Existenzphilosophie* (1943), *Die Ehrfurcht* (1947), *Neue Geborgenheit* (1955), *Die Lebensphilosophie* (1958), *Existenzphilosophie und Pädagogik* (1959), *Maß und Vermessenheit des Menschen* (1962), *Mensch und Raum* (1963) においても、詩人の作品のなかからしばしば引用されているのであるが、これをみても解るように、現代の哲学者のなかでも Bollnow ぐらい文学に関心の深い人は少いといえるであろう。私はここで、Bollnow の文学研究の中核を貫いて流れている

精神を、全体的な視点に立ってこれから紹介しようと思うのであるが、そのためにはまず **Bollnow** の哲学思想の概要を説明しておかねばならない。というのは、少し注意深く観察してみるならば、彼の文学研究は彼の哲学思想と如何に緊密な関係にあるかが解るからである。

Bollnow の思想に決定的な影響を与えたのは、**G. Misch** や **H. Nohl** の場合と同様に、**Dilthey** の「生の哲学」(**Lebensphilosophie**) である。生の哲学は、**Kant** や **Hegel** によって代表されるドイツ観念論のような、形而上学やロゴス中心の哲学ではない。観念論は認識の対象としての生を把握する際にはいつも、論理化され体系化された概念規定や前提条件を設定するが、それに対して生の哲学は、人間とその歴史性 (**Geschichtlichkeit**) としての生 (**Leben**) を、人間のあらゆる行為を規定し関係づけている窮極の「関連点」(**Beziehungspunkt**) とみなし、それを具体的に、全体的に、精神的立場より理解しよう (**verstehen**)* とする哲学である¹⁾。生の哲学を思想的に位置づけるならば、それは **Jacobi**, **Sturm und Drang**, **deutsche Romantik** の底流をなしているドイツ非合理主義の伝統の上に成立した哲学である²⁾。そしてまた生の哲学は、個々の生はすべて等価値を持っており、窮極的には全体的な生に支えられていると考えている点においては、世界観的には汎神論 (**Pantheismus**) 的立場に親近性をもっている³⁾。

* 「理解する」(**verstehen**) ということは、能力ということを前提としている。**verstehen** は「手仕事」(**Handwerk**) と密接な意味の関連をもつものであって、**Handwerk verstehen** という熟語をみても解るように、「能力」(**können**) や「仕事に熟達すること」(**Beherrschung einer Leistung**) を意味している⁴⁾。

生の哲学は、観念論では到底把握できないような生の多様性と流動性を具体性に即して、その内より理解しようとしたのであるが、ここに生の哲学の精神科学 (**Geisteswissenschaft**) 上の偉大な功績とともに、またその思想的意義があると云えよう。対象や人生を公式的価値判断や先入感にとられることなく、つねに具体的で広い視野に立って、内面的に理解しようとする **Bollnow** の学問的態度は、生の哲学の決定的影響に負うところである。この点においては、**Bollnow** は **Metaphysiker** であるよりも、むしろ **Empiriker** の立場をとるともいわれよう。

しかし生とは何か、生と云ってもそれは個人の生を指すのか、超個人的で普遍的な生を指すのか、歴史のなかで変化する生を云っているのか、従来その生についての概念規定がはなはだ曖昧で不統一であった。そしてしかも、生を構成するすべての要素を、等価値をもったものとして公正に受け入れようとする生の哲学は、普遍的妥当性を探究する哲学本来の立場からは、相対主義的傾向をもつものとして批判されざるをえなかった。かくしてここに、生の哲学に必然的に内在する相対主義的傾向は、如何にして克服されるべきであるかという、哲学上もっとも本質的な問も生じたのである。かかる生の哲学の生の相対主義的帰結に直面して、生の内部に絶対的な最後の支柱を求めようとするところに、実存主義 (Existentialismus) の出発点⁵⁾があったのであるが、Bollnow は、生の哲学より実存主義に到るこの精神史の潮流を、現代史の基本の動向とみなし、実存主義との対決のなかに、現代におけるもっともアクチュアルな問題を見出したのであった。

しかし実存主義と云っても、Heidegger, Camus, Sartre 等の無神論的実存主義や、Guardini, Marcel の有神論的実存主義の場合にみられるように、種々様々の世界観があるが、実存主義がこのように多様な表現をとる根本の理由は、実存主義が中核においては、人生に対する態度の全般を問題としているところにある。Bollnow は実存主義と対決する際には、実存主義者達すべてに共通している主要な特徴として、実存主義者固有の倫理精神、実存主義における雰囲気 (Stimmungen)⁶⁾ を抽出し、これらを哲学的人間学の見地より多角的に分析するという方法を用いている。そしてこの場合、Bollnow の論旨は主として Heidegger との対決を中心に展開されているように思われる。

現代においては、あらゆる面の価値転換が行なわれ、われわれが今迄信じて何等疑いをもたなかった人生の価値基準が、妄想であったことが曝露された。そして、虚無と頽廢、非合理性、偶然性等の非人間的な現象が、現代の社会に蔓延するに到った。かくして、本来の人間として存在するための基盤とも云うべき存在の故郷を失い、客観的世界に対する健全な関係をもたなくなった現代人は、自己の有限性を有無を云う余地なく自覚せねばならなかった。存在の内部に無 (Nichts) が浸透しはじめた結果、主体性

を失い、ただ偶然の力に支配されている現代人の存り方を、Heidegger は „Sein und Zeit“ において、「被投的存在」(Geworfen-sein) と存在論的に定義している。そして Heidegger は、「死」(der Tod) という避けがたい現実が、存在を構成しているもっとも重要な要素としてわれわれの内に存在しているという、現代の悲劇的状况を鋭く洞察して人々に示した。このように何処にも出口のない限界状況に立たされている現代人は、虚無主義の脅威に対して無力な、不毛性に止まるか、虚無と死の脅威の現実をそれ自体として受容し、本来的自己に人間存在最後の核心を求めようとする、絶対的決断の立場に立つか、そのいずれかであったが、実存主義はまさに後者の立場をとる人生哲学である。

実存主義によれば、人間生活の本質は危機のなかにあり、人間は危機を通じてのみ真の自己自身となることのできるものである。というのは、虚無の不安に直面しても主体性を失わず、外部からの如何なる破壊にも屈しない内部の支えを見出すことによって、真の自己自身を実現することこそは、実存主義の主題であったからである。たとえば Heidegger は、或る状態に係り合っている人間が、「決断」(Entschlossenheit) によって、「平人」(das Man) の「頹落態」(Verfallenheit) より、自己の「本来的存在可能」(sein eigentliches Sein-können) にむかって「投企する」(sich entwerfen) ことのなかに、現存在としての人間の窮極の意味を見出している⁷⁾。とにかく Heidegger の場合にみられるように、実存主義にとっては、虚無の脅威から逃避せずに、人間の能力のすべてを傾けて、最後の絶対的なものとしての自己自身を生かすための「決断」(Entschlossenheit) や「賭」(Einsatz) 等の英雄的行為がもっとも本質的であった⁸⁾。だから実存主義は、一口で云えば、現実の虚無と不条理や人間の頹落と挫折を通じて、かえってそれらを根本的に超えて絶対的なものにつながるようとする人生哲学なのである。だから真に「実存すること」(Existieren) は、所詮「それを超えてゆくこと」(Transzendieren) を意味していた⁹⁾。

Bollnow によれば、実存主義は、喧騒で慌しく、しかも利他的で不安な現代の危機の端的な表現である¹⁰⁾。そしてまた、虚無の脅威に毅然として対決するという点においては、実存主義は高度の倫理精神に由来するものであって、虚無主義とは載然と区別されるべきものである¹¹⁾。かくして

Bollnow は、挫折を通じて自己自身になるためにすべてを賭けることを説く実存主義が、人間形成にとって如何に本質的なところを衝いているかを強調し、その教育的意義を高く評価している¹²⁾。

けれども、賭や決断等の英雄的倫理を絶対化しようとする実存主義が、現代の問題に対する真に正しい解決を与えてくれるかどうかということがここで問題になってくるが、けだし Bollnow 哲学の窮極の課題の一つは、この問題の究明にあったと云えよう。

Bollnow によれば、実存主義のかかる英雄主義は、成熟した良識の目からみれば、何処か強引で異常なところがあり、場合によっては空虚な冒険主義に陥入り、人間を荒蕪たる孤独の殻のなかに閉じ込めてしまう危険がある。ここに実存主義の不毛性と限界をみる Bollnow は、実存主義よりもっと広い視野に立って、人間や世界の問題を観察する必要性を繰返し強調している。すなわち、人間存在の核心を規定しているものは、実存主義者達が考えているように、不安で異常な Stimmung ばかりではない。明るい肯定的な Stimmung もまた人間にとって、本質的なものであって、これらネガティブな側面とポジティブな側面との両面が、人間存在の基本構造をそのもっとも深いところで規定していると云える。そして問題をより具体的・感性的に考察してみるならば、明るい希望的側面の方が、不安のなかに生きる現代人にとって、より本質的であることが解るであろう。このように考える Bollnow は、何等かの方法で実存主義の限界を突き破って、人間を真に人間として生かす場、真の實在によって支えられた、人間らしい生活を可能ならしめる場として、われわれの魂の故郷となるべき「新しい安住の世界」(Neue Geborgenheit) を確立する可能性を多面的に追求している¹³⁾。ここに、人間が「安住している」と感じている世界における人間の態度と、同時にこの世界の状態が各々問題になってくるのであるが、Bollnow は前者を「倫理学」(Ethik) の問題として、後者を「存在論」(Ontologie) の問題として、これら相互不可分の関係にある方法論を駆使して詳細に分析している。

ではまず Neue Gborgenheit の倫理的解明より入っていくことにしよう。Bollnow は、実存主義が極度に異常なものや英雄的なものを、真に創

造的な道徳とみなすがために、非合理主義の過剰を招き、極端になるとナチスのような地獄に陥入る危険を孕んでいるのを透視し、理性 (Vernunft) 的態度が人間にとって如何に必要であるかということを再認識している¹⁴⁾。そもそも理性は本来的には、一部の人が考えているような感性の枯渇し、魂の通わぬ抽象的・非人間的な原理ではない。精神史的に考察してみるならば、理性はドイツ浪漫主義のように、ドイツのヨーロッパにおける孤立という、特殊な歴史的境位より生まれた思潮ではなく、Aufklärung というヨーロッパ共通の思潮を支えた原理であった。そして理性 (Vernunft) という名詞は「聞く」(vernehmen) という動詞から来たものであるのをみてもわかるように、全体的な視野に立って他人の意見を尊重し、普遍的妥当性を目指して努力しようとする、ヒューマンステイックな原理であって、対立や葛藤を克服し、非合理的・無意識的なものに左右されて主観化するのを防ごうとする、聡明で明晰な精神の働きである。こういうわけで、人間らしい在り方を忘れた現代人にとって、とりわけヨーロッパで孤立し視野の狭くなったドイツ人にとって、Aufklärung という全ヨーロッパ的文化現象の活力となった理性の精神を、ここで再検討することが如何に必要となってきたかということに、Bollnow は着眼している。かくして Bollnow は、識的な理性の原理に裏づけられた「素純な倫理性」(einfache Sittlichkeit) にもう一度かえることによって、はじめて実存主義の克服の道が開けてくると考えたのであった¹⁵⁾。すなわち彼は、現代人がもはやあまり顧みない良くなったけれども、実はすべての人々に共通している倫理である、「忍耐強さ」(Geduld)、「敬虔さ」(Ehrfurcht)、「泰然自若」(Gelassenheit)、「善意」(Güte)、「希望」(Hoffnung)、「信頼」(Vertrauen)、「感謝」(Dankbarkeit) 等の日常的で素純なものの意義を高く評価している¹⁶⁾。実存主義の倫理はその Radikalismus のために、現実の世界とは相容れなくなるために、内に無限の可能性を秘めた生を全体的に包括的に把えることができない。そしてまた実存主義は、極度に時代的性格を帯びている点にもその限界がある。これに対して先にあげた素純な倫理は、平凡で解りきったような印象を与えるために、あまり人の目につかないけれども、しかし歴史の推移に左右されずに生の世界そのものに根ざしている点では、実存主義の倫理よりもはるかに根源的に根強いものをもっている¹⁷⁾。だから素純な倫理こそは、

人間らしい心情が失われ、知識人が知性の過剰に陥入っている現代において今やもっとも深く反省されるべき事柄ではないのか。この点についての Bollnow の人間学的洞察は実に鋭いものである。このように考える Bollnow は、人間学的に深くて良識的な世界観に帰ることによって、そのなかより、実存主義よりもかえって普遍的で含蓄のあるものを、生きた姿で把握しようと努力したのであった。

しかし、これら素純な倫理のなかで Bollnow にとってもっとも本質的なものは希望である。かかる意味の関連において Bollnow 哲学は、いわば「希望の哲学」であると云ってよいであろう。

Bollnow は、「配慮」(Sorge) や「時間性」(Zeitlichkeit) 等の人間性の暗い否定的な面から存在を解明しようとする Heidegger の考えを手厳しく批判している。というのは、かようなペシミズムは、人間を真に人間として生かす面、すなわち存在の肯定的な側面を無視し、全的に統合された人間像を一面的に歪めてしまうからである。そしてしかも希望の方が、人間生活にとってはるかに根源的であって、希望の地平においてのみ、配慮や時間性等の人間にとって否定的な面も正しく理解できるのである。希望がなければ、実存主義的決断も空虚な冒険に終るに過ぎず、希望こそは決断にとっては、まさに支えとなる根底である。希望はかくして、人間存在の中核に係るものであって、人生を人生として可能ならしめる活力的原理である。だから希望は、筆竟、魂の根底となるものとも云えよう。かかる観点より Bollnow は、Camus の「ペスト」(La peste) に描かれているような、未来に対する希望のない絶望的な魂の倦怠、その黙然として語らぬ味気のなさを、人生全体の抛棄とみなし、強く否定している。かくして Bollnow は彼独自の立場より、希望の人間学的意義を縷説したのであった¹⁸⁾。

希望の特性をより具体的に内から理解するために、Bollnow は希望(Hoffnung)と期待(Erwartung)との根本的な相異を現象学的に分析することよりはじめて¹⁹⁾。人間が期待する場合、期待したことが必ず起るといふ確信が前提となっている。そして人間は全注意力を傾けて期待されている出来事に相対している。しかし、人間が何かを希望する場合、希望するものが自己の方にやってくるに委せ、期待の場合よりもはるかに自由に広々とした心とゆとりをもった態度で人生全体に対処している。Rilke は

期待をよせていても応じてくれない恋人について、「時間の錠前」(Schließe der Zeit) という表現を与えているが、期待された出来事は、離れている時間を、錠前で閉じるように緊密に現在と結びつけているのである。すなわち期待の場合には、将来起りうる出来事は、現在すでに与えられていると云えよう。だからここにおいては、あらかじめ決定している将来の結末が何よりも大切であるが、しかし、このようなかたちで与えられている将来は、人生の意味に基礎づけられた将来と、根本的に予見できないような真に開かれた可能性をもっていない。Bollnow はここに期待の限界を見極めることによって、希望の中核に迫ろうとしたのであった²⁰⁾。

希望の地平において与えられている将来は、期待の場合とは対照的に、見渡すことのできない諸々の可能性を繰り展げてくれる。かくして人間は、将来の贈物という根本的に予見できないもの、すなわち合理的思惟では考えることのできないような方法で人間に出会うものに対して、心を開くのである。希望をもつ人間は、だから Marcel のいうように、人間に対してかたがけられる諸々の要求に対して「自由に対処できる」(disponibel) のである。希望によって開かれた地平は、実存主義者の考えているように、脅威としては体験されず、むしろ逆に、人間に援助の手をさしのべ、人間が虚無の深淵にひきずりこまれぬようにする力となるのである。かくして希望は、人生に対する信頼の表現となり、また支えられていることに対する感謝の気持ちに結びつくのである。ここにおいて、信頼と希望と感謝は相互不可分な統一体を形成し、以下の時間関係に対応している。すなわち信頼は現在に、感謝は過去に、希望は未来に対応するのである²¹⁾。

しかし人生肯定的な倫理としての希望は、決して単純で安易なオプティミズムを意味するものではない。それはつねに勇氣ある「敢行」(Wagnis) を前提としている。だからこそ Bollnow は、希望が Neue Geborgenheit を樹立する倫理的な力となりうることを力説したのである。

次に存在論の問題に入っていくことにしよう。人間が堅実で安定した生活を営むためには、恐怖、敵意、不安等の外部から闖入してくる否定的な Stimmung に対して人間を守ってくれる空間が絶対的に必要である。Bollnow は、魂の安らぎを失った現代人にとっては、秩序ある空間のなかに「住む」(wohnen) ことによって、混沌にさらわれないようにすることが、

如何に重要な問題となっているかということ、Marcel や後期の Heidegger の思想、Minkowski の空間論を援用しながら力説している²²⁾。かかる空間が開かれるのは、Marcel が考えているように、人間が利己主義にひきまわされているメカニズムとしての Es の次元をこえて、親切で信頼に価する隣人としての du の次元にまで高まってゆくことによって、いいかえれば、魂の通った人間相互のつながりを回復することによって、はじめて可能なのである。たえず不安におびえている現代人は、人間化された空間のなかに住むことによって、魂の安らぎを回復し、自己自身の世界を確立し、現実の世界に対して正しい関係をもつのである。そしてここにおいて人間ははじめて、時間性や歴史の無常さを超えて、真に永遠なるものにふれるのである。かくして Bollnow における存在論は、かかる観点よりして Neue Geborgenheit を空間論的に解明することを主眼としている²³⁾。

以上が Bollnow における Neue Geborgenheit の基本構造であるが、この Neue Geborgenheit は安易で何等問題のない安全感を意味するものでは決してない。Neue Geborgenheit とても、人間学的地平としては、やはりいつも実存的な脅威にさらされ、崩壊の危機から免れえないのである。だから人間は、安住ばかりしてはおれないとともに、実存的危機に引きずりまわされてばかりいるわけでもない。真に人間らしい人間の存在は、これら二つの側面の動的な相互関係のなかに成り立つのであって、この両面の動的関係を具体的に慎重に明視することによって生きた人間像を確立することこそ、Bollnow にとっては、哲学者としての自己の貴い使命であった²⁴⁾。そしてまた現代において、実存主義的な危機が決定的であればあるだけに、Neue Geborgenheit の地平が現代のアクチュアリティとして如何に決定的な意義をもつかということ、Bollnow はより強く主張せざるをえなかったのであった。

以上が Bollnow の哲学思想の要諦である。注目すべきことに、Bollnow はまた、哲学の領域をこえて、詩人の世界解釈のなかに実存主義的な危機を克服し Neue Geborgenheit に到達する可能性を見出し、最初に挙げた „Rilke“、„Unruhe und Geborgenheit im Weltbild neuerer Dichter“、„Französischer Existentialismus“ を世に問うたのであった。

これらの著作のなかで論じられている現代詩人達のなかで、Bollnow がとりわけ深く傾倒している詩人は Rilke である。すなわち Bollnow は、„Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge“ や „Duineser Elegien“ の時代より Sonette an Orpheus 以後の時代に及ぶ詩人 Rilke の歩みのなかに、虚無と不安の深淵のなかに沈潜することによって、実存主義を克服し、遂に Neue Geborgenheit に到達した過程をつぶさに辿っている²⁵⁾。だから Bollnow の Rilke 研究の個性的な特質は、従来の Rilke の研究家達がそれほど重要視していなかった、Sonette an Orpheus 以後に書かれた詩やフランス語の詩を、Neue Geborgenheit を讃えた詩として実に高く評価し、これらのなかに詩人 Rilke が到達した創造の高嶺を見極めた点にある²⁶⁾。一例をあげてみるならば、Bollnow の考えている Rilke の最後の発展段階に書かれた諸々の詩のなかに、次のような一節がある。Wann war ein Mensch je so wach/ wie der Morgen von heut? Nicht nur Blume und Bach/ auch das Dach ist erfreut./ Selbst sein alternder Rand,/ von den Himmeln erhellt,/— wird fühlend : ist Land,/ ist Antwort, ist Welt./ Alles atmet und dankt,/ O ihr Nöte der Nacht,/ wie ihr spurlos versankt. 重苦しく暗い夜の苦しみはすでに去り、新鮮で水々しい生命の通った朝のたたずまい、自然の生命が生き生きと呼吸し、肯定的な言葉を語る明るい世界、これらこそ Bollnow の解釈によれば、Malte や Duineser Elegien 時代の実存的危機を克服することによってはじめて結晶した Neue Gborgenheit のイメージである²⁷⁾。Bollnow はこのように文学作品を引用することによって、自己の論旨に具体的に適確なイメージを与え、それを可視的に表現しようとしているが、そこには彼固有の繊細で鋭い感受性が躍如として働いている。

Bollnow はまた „Rilke“ 以外の文学研究書においても、他の詩人の世界像のなかに、かかる Neue Geborgenheit のイメージを見出しているが、それらの例としては以下のものがあげられるであろう。すなわち、かくれて目に見えぬ深いところに存在する「世界の健全さ、魂の健全さ」(das Heil-sein der Welt und das Heil-sein der menschlichen Seele) をうたった Bergengruen の詩²⁸⁾の次の一節、Die Welt war heil in mir, 或いは彼の次のような詩、Was aus Schmerzen kam/ war Vorübergang./ Und mein Ohr

vernahm/ nichts als Lobgesang. 荒涼として無限に広がる砂漠のなかに城を築き、そのなかに「住む」ことが、人間性にとって如何に本質的に永遠な問題であるかを描いた、Saint-Exupéryの遺作 *Citadelle*²⁹⁾の世界もそうした一例であるが、無制限な情熱、実存主義流の極端な冒険主義を否定して、秩序や中庸を重んじる「均勢の精神」(der Geist des Gleichgewichts)のなかに現代の可能性の地平を開拓した Weinheber³⁰⁾の詩の次の一節、*Gleichgewicht hält wieder die Welt: es haben/ keine Vorherrschaft die Gewalten: Siegreich/ ist der Mensch, so lange er schön ist.* もまた、かような観点から注目されている。

では Bollnow は、自己の専門の範囲をこえて何故文学の領域に入っていくかねばならなかったか、最後にこの問題を明らかにしよう。

哲学は如何に具体的であろうと努力しても、最後のところではやはり普遍的な真理や妥当性を求めるがために、無意識的なものや個別的なものや、具体的な生の実相を十分に形態化しえないままに、抽象化するに止まることが少なくない。すると哲学者が自己本来の使命に誠実であろうとすれば、とかく抽象化への傾向に束縛されて、生きた現実へのつながりを失い、人生に根源的に本質的にもっとも深くつながろうとする哲学本来の使命を見失ってしまう。これは哲学自体に内在する悲劇的アイロニーである。かかる哲学の限界を打破して生の全体像を多面的に理解しようとする、内心の欲求より Bollnow は、多彩に変化する生の世界や、人間の細やかな感情の動きを哲学よりも自由に、具体的・感性的に表現している文学作品に深い関心を示したのであった。

哲学者も詩人も、言語を表現手段とする作品のなかに自己を没入し、発展させてゆく点において共通している。文学作品が如何に具体的なものであっても、その根底には詩人の「世界像」(Weltbild)がある。詩人が世界を如何に解釈するかという人生問題に逢着したときには、たとえ自己本来の意図に反してにせよ、詩人と云えども哲学的立場をとらざるをえない。ここに Bollnow は、哲学と文学とが内面的につながりをもつ必然性を確認したのであった³¹⁾。

かくて Bollnow が文学を研究する際にもっとも重要なものは、詩人の

世界解釈であって、様式論やその他の美学的問題は彼にとってはあまり重要ではなかった。だから Bollnow の文学研究は、文学を鑑賞し理解することではなく、哲学者による文学作品の **Reduktion** であった。そうなると、**Bollnow** は作品を全体像として把握していない、ただ自分自身の思想に共通する面だけを作品のなかから抽出し、これを哲学的に論じているにすぎないという批判もまた生まれてこよう。そして、かかる批判に対しても **Bollnow** は、まともに直面し、哲学者による文学研究の限界も認めているけれども、その反面、哲学者による文学研究が人生の窮極の意味や普遍的妥当性等の人間性窮極の核心に迫るものである以上、それ自体意義深い仕事であることにゆるぎない確信をもっている。

Bollnow は文学に関する著作においても、哲学に関する著作の場合と同じように、実に慎重な態度で論議を進め、自己の問題性を公式的な価値判断や一定の先入観にとらわれることなく、様々の側面より多角的に慎重に検討している。すなわち、**Neue Geborgenheit** の問題をみてもわかるように、**Bollnow** はあくまでも生きた体験を重じ、最後のところでは決して簡単に割切っていない。さながら音楽の終りに仄かに漂う余韻のように、**Bollnow** の思想は何処か割切れぬものの奥行きを深さを感じさせるのである。ここには肯定と否定とを峻別して一元論的な価値判断を下すような、軽卒な権威主義や、一部の研究者にみられるように大上段にかまえたり、やたらに深刻ぶって複雑な思索を操るような不遜な態度は、みじんもみうけられない。**Bollnow** は知性の傲慢に縁遠い人である。何よりも魂の生きた反応を重んじる **Bollnow** は、すべてを感性の光に照して内部より具体的に理解しようとする態度に徹している。また **Bollnow** が、**Heidegger** の考えや、**Guardini** の **Rilke** の解釈を批判する場合でも、相手に対する尊敬の念を決して忘れてはいない。この点では **Bollnow** は、最後のところではいつも謙虚である³⁹⁾。

以上のことを考慮してみると、**Bollnow** の思想においては、知性と感性が渾然と調和していることが理解されるであろう。バランスがよくとれているだけに、いわゆる現代的感覚の持主たちは、**Bollnow** の思想はあまりにも健全で常識的であると云うであろう。しかし、当り前で解りきったこと

が本当に解っていない現代において、一見常識的なように思われる Bollnow の思想こそは、現代人の急所を的確に突いたものであって、われわれにとってアクチュアルな現実に深く根を下したものである。

文学に関する著作も哲学・教育学に関する著作も含めて Bollnow の業績のすべてを貫いているものは、この世の人生と生きた人間に対する彼の限らない愛着であり、また非人間化した現代において失われた人間性への信頼を回復しようとする真摯で敬虔な心情である。Bollnow を理解するにあたってわれわれは、まずこの彼のヒューマンイズムと教育者の魂を汲みとらねばならない。そしてまた、文学の魅力も最後のところでは、何処か人間性の最深最奥にふれるところにある以上、Bollnow の文学研究も、一面においては、やはり文学の深い理解に基づくものであろう。

註

- 1) Vgl. O. F. Bollnow, *Existenzphilosophie*, 5 Aufl. Stuttgart 1960, S. 11 f.
- 2) Vgl. O. F. Bollnow, *Lebensphilosophie*, Berlin. Göttingen. Heidelberg 1958, S. 3 f.
- 3) Vgl. O. F. Bollnow, *Dilthey*, 2 Aufl. Stuttgart 1955, S. 16 f.
- 4) Vgl. O. F. Bollnow, *Maß und Vermessenheit des Menschen*, Göttingen 1962, S. 29.
- 5) Vgl. O. F. Bollnow, *Existenzphilosophie*, S. 12 f.
- 6) この *Stimmungen* の問題に関しては、O. F. Bollnow, *Das Wesen der Stimmungen*, 3 Aufl. Frankfurt M 1956,において詳細に論じられている。
- 7) Vgl. Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 10 Aufl. Tübingen 1963, S. 295 ff.
- 8) Vgl. O. F. Bollnow, *Neue Geborgenheit. Das Problem einer Überwindung des Existentialismus*, Stuttgart 1955, S. 34 ff.
- 9) Vgl. *ibid.* S. 33 ff.
- 10) Vgl. O. F. Bollnow, *Neue Geborgenheit.* S. 12.
- 11) Vgl. *ibid.* S. 17.
- 12) Vgl. O. F. Bollnow, *Existenzphilosophie und Pädagogik*, 2 Aufl (Urban Bücher 40) Stuttgart 1962. S. 149 ff.
- 13) *Neue Geborgenheit*, は、かかる意図の下に上梓されたのである。
- 14) Vgl. O. F. Bollnow. *Maß und Vermessenheit des Menschen*, S. 27 ff.

- 15) Vgl. *ibid.* S. 106 f.
- 16) この問題は *Neue Geborgenheit* のなかの *Die ethische Problematik* の章や *Einfache Sittlichkeit*, 3 Aufl. Göttingen 1962. において詳論されている。
- 17) Vgl. O. F. Bollnow, *Einfache Sittlichkeit*, S. 20 ff.
- 18) Vgl. O. F. Bollnow, *Neue Geborgenheit*, S. 81 ff.
- 19) Vgl. *ibid.* S. 102 ff.
- 20) Vgl. *ibid.* S. 109 ff.
- 21) Vgl. *ibid.* S. 135 f.
- 22) Vgl. *ibid.* S. 160 ff.
- 23) この空間論の問題は, *Neue Geborgenheit. のなかの Die ontologische Problematik* の章, および教授の最近の著書 *Mensch und Raum*, Stuttgart 1963 において追求されている。
- 24) Vgl. O. F. Bollnow, *Neue Geborgenheit*, S. 189 ff.
- 25) Vgl. O. F. Bollnow, *Rilke*. 2 Aufl. Stuttgart 1956.
- 26) Vgl. *ibid.* S. 308 ff.
- 27) *ibid.* S. 332.
- 28) Vgl. O. F. Bollnow, *Unruhe und Geborgenheit im Weltbild neuerer Dichter*, Stuttgart 1953, S. 118 ff.
- 29) Vgl. O. F. Bollnow, *Französischer Existentialismus*, Stuttgart 1965, S. 133 ff.
- 30) Vgl. O. F. Bollnow, *Unruhe und Geborgenheit im Weltbild neuerer Dichter*, 2 Aufl. Stuttgart S. 70 ff.
- 31) Vgl. *ibid.* Vorwort. *Einfache Sittlichkeit* S. 183 ff.
- 32) Vgl. Eckhard Heftrich, *Die Philosophie und Dichtung*, München 1962. S. 78 ff.
- 33) かかる態度の問題は, O.F. Bollnow, *Ehrfurcht*, Frankfurt/M 19 において論じられている。

附記 この紹介文を草するに際して、関西学院大学文学部教授三井浩先生よりいろいろ有益な教示を賜わった。厚く御礼申しあげたい。また、

Die Beziehungen zwischen Dichtung und Philosophie bei Bollnow

Ibuki SHITAHODO

Methodische Schwierigkeiten und systematische Strenge hindern die Philosophen, einen größeren Umkreis konkreter und empirischer Lebenserfahrungen unbefangen mit ihrer Aussage zu erfassen. Im Gegensatz dazu können die Dichter, durch solche methodische Bedenken unbehindert, die Fülle des Lebens bis in seine unbewußte Tiefe hinein lendig darstellen. Deswegen bieten die dichterischen Zeugnisse uns eben einen ungeheueren Reichtum, den der Philosoph bei seiner Frage nach dem Wesen des Menschen nie übersehen darf. Aus dieser Einsicht ist Bollnow den engen und vielfältigen Beziehungen zwischen Dichtung und Philosophie nachgegangen und hat seine Werke „Rilke“, „Unruhe und Geborgenheit im Weltbild neuerer Dichter“ und „Französischer Existentialismus“ dazu veröffentlicht. Die Beschäftigung mit der Dichtung bedeutet für Bollnow kein Ausweichen, sondern sie kommt ursprünglich aus der inneren Notwendigkeit seines eigenen Philosophierens.

So habe ich versucht, hier auf diesem beschränkten Raum in einem skizzenhaften Abriß die in diesen Schriften zugrundliegende Problematik darzustellen und in den inneren Kern der von Bollnow entfalteten Gedankenwelt einzudringen. Bei der Beschäftigung mit der Dichtung kommt es ihm immer darauf an, das Weltbild des Dichters philosophisch und anthropologisch zu beleuchten. Er hat an Beispielen dichterischer Aussage gezeigt, wie der Weg des Lebens durch die schmerzliche Erfahrung einer bedrohlichen und unheimlichen Welt im Existentialismus zu einem festen Gefühl der neuen Geborgenheit führt. Es handelt sich hier um die Notwendigkeit, durch das äußerste Durchleben aller existentiellen Bedrängnisse zu einer letzten Überzeugung in einer neuen Seinserfahrung

zu kommen. In dieser Hinsicht bietet uns seine Beschäftigung mit der Dichtung einen aufschlußreichen Zugang zum Verständnis des Wesens der Dichtung, wobei nicht übersehen werden darf, daß seine Interpretationen primär von der Philosophie und nicht dem einzelnen Dichtwerk ausgehen. In diesen Bemühungen können wir seine leidenschaftliche Bejahung des diesseitigen Lebens und seine eigene humanistische Gesinnung erkennen.